砂漠の水彩画

松山 利夫（まつやまとしお）
民族社会研究部

画家をさがして

オーストラリア大陸のほぼ中央、砂漠の真ん中にできた都市、アリス・スプリングズ。街区を二分する乾季のトッド河には、アボリジナルの姿がちらほら見える。その乾ききった砂だらけの河を、僕は町はずれから上流に向かって歩きだした。アボリジナルの水彩画家をさがすためである。アボリジナルと出会うたびに、だれかれとなく画家を知らないかとたずねる。うさんくさそうに見られ、素っ気ない返事がかえるだけで、いくらたっても手がかりがつかめない。

砂漠にひろがるアレンテの土地。ケヴィンはここを描いたのだろうか

許可証がないまま、翌日は思いきって、街区のはずれにあるアボリジナル居住区へいってみる。そこには、砂漠の各地からさまざまな目的でこの町にでてきた、一時的な滞在者がいるはずである。入り口には「立ち入り禁止」の看板がある。それを無視して足を踏み入れると、まもなくして数人の男女にとりかこまれた。「何しに来た」「タバコをくれ」「ビールを買ってこい」。僕がまきおこしたわけのわからない大騒ぎが一段落すると、デヴィッドと名のる男が絵を描いてやるという。「画家か」ときくと、「ハーマンス・バーグ派だ」とこたえる。

ハーマンス・バーグ派とは、アレンテ（アランダ）の男性、アルバート・ナマチラの流れをくむ水彩画とその作家たちをいう。一九三〇年代、ルーテル教会派が運営するハーマンス・バーグ・ミッション（伝道所を中心にした集落）に住んでいたナマチラは、ここを写生旅行の拠点にしていたイギリス人画家、レックス・バタビーの案内役をつとめていた。何回か砂漠を案内し、この集落で開かれたバタビーの展覧会を見たあとの一九三六年のことだった。ナマチラは、描くべき対象の選択や構図の取り方、色や筆使いなどの制作技法をほとんど教えられなかったにもかかわらず、バタビーの道具を借りて、一枚の作品「すり鉢状の土地」を描きあげた。

ナマチラが見よう見まねで作品を完成できたのには、つぎのような背景があったと思われる。砂漠地域などで意図的に伝統的な生活をするアボリジナルは、新しい技術を観察にもとづいて獲得してきた。ナマチラは案内を重ねるうちに、水彩画の技法を習得したのだろう。

写生はしない

その後ナマチラは、砂漠の風景を題材にした多くの作品を制作した。それらは師のバタビーよりも高く評価され、そのひとつを「アボリジナルが制作した作品」としては初めて南オーストラリア美術館が購入するところとなった。こうして彼は、「アボリジナル水彩画家」の地位を確立する。ナマチラはその技法を、多くの親族に教えた。教えられた人は、同じことを彼らの親族に伝えていった。ハーマンス・バーグ派はこうして形成された。

デヴィッドもその一人だという。彼はケヴィンという男性を紹介すると、二人がそれぞれ描いてやろうといってくれる。「ではお願いします」。そう頼むと、「絵の具と画用紙、筆がいる」という。この言葉に面食らった僕は、思わず心のなかでつぶやいた。「こいつら本物か。画家がなんで仕事の道具をもってないんだ」。しかし、二日がかりで探しだした相手である。「嘘も文化のうち」と思いなおして、指定された注文の品をそろえてでなおした。

ケヴィン・ウァイリの作品（標本番号H0102108）

制作中の2人

デヴィッド・コウクの作品（標本番号H0102107）

「俺のカントリー（祖先からの本来の土地）、アレンテの土地を描いてやろう」。アリス・スプリングズは、確かにアレンテの土地にできた町である。二人は新品の道具一式をかかえて屋外に出ると、空きびんに水を入れ、缶をナイフで切り裂いてパレットをつくり、その場に座りこんだ。彼らは画用紙に鉛筆で縁取りをし上半分ほどを水色に塗ると、いきなりガムの木（ユーカリの一種）らしきものを描きはじめた。おどろいた僕は、「写生はしないのか」と叫んでしまった。ハーマンス・バーグ派の作品はすべてが写生だと思っていたし、またそうも解説されていたからだ。「頭のなかにある」。それが二人のこたえだった。

ツーリスト・アート？

二時間ほどで完成した二枚の水彩画は、確かにハーマンス・バーグ派の特徴をそなえている。地平線が高いところにおかれ、手前の樹木は非対称をなし、画面のはしも中央と同じ重さで描かれている。さらに作品には、ヨーロッパ人がもたらした家屋も家畜も、アボリジナル自身でさえも登場しない。デヴィッドたちは、まぎれもないハーマンス・バーグ派の画家だった。彼らが描いたのは、創世の時代に精霊が創りあげた風景であり、幾世代にもわたり人びとが生きてきた土地であった。二人の画家もまた、そこに暮らしている。

砂漠の水彩画は、いまなお「ツーリスト・アート」としてしか専門家は評価しない。しかし、それらの作品は、砂漠にひろがるアボリジナルの世界を、人びとに紹介しつづけている。

（これらの作品は一九八二年七月に収集した）